

第2学年2組 国語科学習指導案

第3校時 場所 2年2組教室 授業者 岩崎 兼司

1 単元名 みきの気持ちがよく分かる『みきのたからもの吹き出し本』をつくろう

子どもたちは、これまでに「ふきのとう」や「スイミー」等で「劇遊び」や「ペープサート」など物語世界に直接働きかける言語活動を通して「登場人物の行動の様子」や「場面の様子」等を具体的に想像する事ができるようになってきた。また「登場人物の行動の理由」を考える際には、お互いの表現の違いを教師が見取り、その表現の違いを全体で取り上げる事で、「行動の理由」を考える学習を行った。しかし子どもたちが自ら「どうして〇〇したんだろう？」等の行動の理由に立ち止まる姿は少なかった。

本単元では、学習材「みきのたからもの」を用いて、自ら叙述に立ち止まり登場人物の行動を具体的に想像する力を身に付ける事ができるようにする。みきのたからものは、「みき」を中心人物とした三人称限定視点の物語であるが、みきの心情を直接語っている描写が少ない。しかし、「なんども手をふりました」「小さな石をぎゅっとにぎったまま」等みきの行動描写が多く、読者がみきの行動やその理由から心情を想像する事ができる作品になっている。

これらを踏まえて前後の出来事や行動等の叙述と結び付けて行動の理由に立ち止まり解釈を話し合う事を通して想像したみきの心情を「ふきだし」に書くようにする。その活動を通して、言葉に立ち止まり互いの解釈の違いをたのしむ子どもを育てていきたい。

2 単元について

- (1) 本単元では、「みきのたからもの」を学習材として、場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像する力の育成をねらう。

そこで、本実践では、『ふきだし本』という言語活動を設定する。物語の様々な場面に書かれているみきの行動の叙述に対して、みきの心情を表す「ふきだし」をつけていく活動を行っていく。この活動を通して登場人物の行動の「理由」からその背景にある心情等を具体的に想像する事ができるようにする。

場面の中でも第四場面は、「なんども手をふりました」や「ナニヌネノンが消えていった空を見上げていました」「石をぎゅっとにぎったまま」等の行動の叙述が多い。子どもたちもそこに立ち止まる事で自分と比べたり、みきの心情を表す「ふきだし」をつけたりしていく。その中で問いが表出していくと考える。みきの行動の理由を中心に話し合い、物語を読み解釈を交流していく中で新たな考えに気づきふきだしを再考する活動へとつながっていく。

- (2) 子どもたちはこれまで、「ふきのとう」と「スイミー」を学習してきた。「ふきのとう」の学習では、劇遊びを通して場面の様子を具体的に想像する事を行ってきた。「スイミー」の学習では、ペープサート劇に取り組んだ。その活動の中でセリフをつけたり、動きを工夫したりする事を通して登場人物の行動を具体的に想像する学習を行ってきた。これまでの学習を生かし、場面の様子を具体的に想像し、「ふきだし」を付けていく中で登場人物の行動に自ら立ち止まり自分と比べながら「問い」を表出させ、全体の課題として設定する。場面の様子や登場人物の様子を想像し直し、複数の叙述を結び付けながら、みきになりきったり、音読したりしていく中で登場人物の行動の理由の解釈を検討していく。その後全体で解釈したことを基に、「ふきだし」を再考していく姿を目指す。今回の学習が次単元の「お手紙」で登場人物の様子を想像し、自分の感想を書く学習へとつながっていく。

- (3) 本単元に関する子どもの実態は、次の通りである。(調査人数：36人)
- ① 文章の中の主語と述語の関係に気をつけて読む際に、行動の主体が誰か読み間違える子どもが2名いる。
- ② 全員が登場人物の行動に着目して読む事ができる。さらに登場人物の行動の理由を考え想像を広げている児童は2名いる。

3 単元の目標

- (1) 文の中にある主語と述語の関係に気付いて文書を読む事ができる。
- (2) ふきだし本を書きながら、登場人物の行動に着目し、行動の理由を想像する事ができる。
- (3) 行動の理由を想像し、粘り強くみきの心情を想像し進んでふきだしを書こうとしている。

4 指導計画 (10時間取り扱い)

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
1 ・ 2	1 学習の見通しをもつ。	○「みきのたからもの」の範読を聞き、本文に感じた事や疑問を書き、全体で共有する事で、疑問をもつ事ができるようにする。 ○ 子どもが着目した本文から、みきの行動の理由について話し合い、実際にふきだしを書いてみる事で、言語活動の枠組みを調整し見通しをもつ事ができるようにする。	【知】文の中にある主語と述語の関係に気付いて文章を読む事ができる。(観察)
3 ・ 7	2 ふきだし本を書く活動に取り組む。 (1) 困り事や問いから課題を設定し話し合う。 (2) 課題に対する自分の解釈から、ふきだしをつくりかえる。	○ みきの気持ちが書けそうかを問い、ふきだして表現させる事で、自分の解釈をもつ事ができるようにする。 ○ 前時の国語日記や、子どもたちの困り事から全体の課題を設定する。 ○ どうやったら気持ちを考える事ができるか解決策を共有し見通しをもち活動できるようにする。 ○ 課題に対する解釈を検討し、どこが書き変わりそうかを全体で交流する事でつくりかえる活動に移行する事ができるようにする。(本時7/10)	【思】登場人物の行動に着目して、行動の理由を想像している。(観察、ふきだし本、国語日記) 【主】粘り強く、行動の理由から心情を想像しようとしている。(観察、ふきだし本、国語日記)
8 ・ 10	3 お互いのふきだし本を読み合い本単元の学びを振り返る。	○ お互いの『ふきだし本』を読み合い、解釈の違いや読んだ『ふきだし本』のよさを交流する事で友達の書いた『ふきだし本』のよさに気付く事ができるようにする。 ○ 単元を通して、どんな力が身についたか振り返り次の単元に生かす事ができるようにする。	【思】お互いの作品を読み合い、友達の書いた『ふきだし本』のよさを見つける事ができる。(観察、国語日記)

5 本時の学習

(1) 目標

「どうしてみきは、石をぎゅつとにぎったままナニヌネノンが消えていった空を見上げていたのか」その行動の理由を話し合う事を通して、前の場面の叙述とつなげてみきの心情を想像し、『ふきだし本』をつくる活動に生かす事ができる。

(2) 展開

時間	学習活動	子どもの思い・姿
10	1 課題をつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 見送ったあとの場面のふきだしが書けないな。 ○ なんでみきは誰もいない空を見上げているのかな。 ○ 確かに、夕方までずっと見ていたって不思議だね。 ○ 私だったら、すぐ帰ってしまうかも。 ○ みきの気持ちが何か隠れている気がする。 ○ 見送った理由を考えるとふきだしが増えそう。
15	2 「どうしてみきは、石をぎゅつとにぎったままナニヌネノンが消えていった空を見上げていたのか」という課題を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ○ きっと、乗り物をずっと見ていたかったんだよ。 ○ たしかに、ありそうだね。だけど、ナニヌネノンがいなくなった後もずっと見ていたんだよ。 ○ 前の場面から証拠になりそうな文はないかな。 ○ 石をもらっている場面とつなげて考えよう。 ○ ナニヌネノンが自分の大切な石を渡した事がみきにとってはすごく嬉しかったんじゃないかな。 ○ みきは、「また会いたいな。絶対忘れないよ」ってナニヌネノンの事を強く思っているんだよ。 ○ すぐ帰ってしまっって、みきはすごく悲しかったんじゃないのかな。だから見上げているんだよ。 ○ きっと、この短時間でみきとナニヌネノンのきずながすごく深まったんじゃないかな。 ○ きっとだれにも言いたくない特別な思い出になったんじゃないかな。
15	3 話し合いの中で見いだした事を中心に、「ふきだし」を再考する	<ul style="list-style-type: none"> ○ だから、みきはその後誰にも言わなかったんだ。 ○ 石を受け取る場面のふきだしを変えてみようかな。 ○ もしかしたら、最後の場面の秘密にしていたところもふきだしに書けそう ○ 「空を見上げていました。」のところとつなげて、ナニヌネノンに対する気持ちを書いてみよう。 ○ 「ナニヌネノンありがとう。この思い出は私だけの秘密にするよ。」
5	4 本時の学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前の文章を読んだりする中でナニヌネノンと出会った事がみきにとっての大切な思い出になった事が分かったから、ふきだしがもっとよくなりそうだと思います。次はもう少し全体を書きかえてみたいです。



これまで、みきの行動に立ち止まり、理由を話し合う中で、みきの心情を想像し『ふきだし本』を書く活動に取り組んできた子どもたち。本時では、「ナニヌネノンを見送った後の場面」を取り上げ、今までの叙述と繋げていきながら、行動の理由を捉え直し、心情を表すふきだしの再考に向かいます。

主体的・対話的で深い学びを生み出す教師の支援（発問・指示・教具・評価）

- 『石をぎゅっとにぎったままナニヌネノンが消えていった空を見上げていた』のふきだしが書けない。」「どうしてみきはこんなことしたの。」等行動の叙述に立ち止まっている国語日記の記述を取り上げ、どうして分からないのかを語らせる事で全体の立ち止まりを生む。
- 教師と数人の子どもと立ち止まった場面を劇化する事で、場面の様子やみきの行動の様子を視覚的に捉えた上で、全体に「困り事を抱えている子の気持ちが分かりそうか」と問うことで、全体の場で疑問を表出し、本時の課題を設定する。

どうしてみきは石をぎゅっとにぎったまま、
ナニヌネノンがきえていった空を見上げていたのだろう。

- 班での話し合いに入る前に、課題の考えを表出する場を設定し、「どこから考えられそうか。」を問うことで叙述とつなげて考えるモデルを示し、解決の見通しをもてるようにする。
- これまで、みきの行動の理由を考える時にどんな解決策を使ってきたかを振り返り、前の場面と繋げながら、どの解決策を使っていくかをグループ内で共有する事で課題の解決に向かう事ができるようにする。
- 課題に対する考えのみを話をしている子どもたちには「どこから考えたのか。」等を問い根拠にもどる事ができるようにする。
- 根拠のみを抜き出している子どもに対しては、「そこからどんな気持ちが分かりそうか」問いみきの気持ちに向かうようにする。
- 「また会えますようにというねがいをこめています。」や「目をかがやかせて」等、複数の叙述から考える事が出来た子に対しては、価値付けた上でどの叙述と結び付けて考えたか板書で視覚的に表す事で、子どもたちが複数の場面の叙述とつなげるよさに気付く事ができるようにする。
- ナニヌネノンとの関係性が変わったという発言から「みきは、ナニヌネノンと出会った事をどう思っているのか。」と問う事で、ナニヌネノンとの出会いが特別なものであった事に気付く事ができるようにする。
- 「みきの忘れられない思い出になった。」等の考えが出てきた場合には、「自分にもみきと同じような忘れられない思い出があるか」問い生活経験を引き出し、みきの思いに寄り添う事ができるようにする。
- 個人で『ふきだし本』を書く活動に入る前に全体の場で取り上げた課題の他にどここのふきだしをつける事ができそうかを意識させる事で、本時で見出した事を基に、他の場面のみきの行動の理由についても考えられるようにする。
- 振り返りの前に「どんなふきだしがついたか」「どここの叙述と繋げたか。」を数名に発表させる。その際、同じ考え方をした子を取り上げ、価値付ける事で、本時の学びを自覚的に捉えられるようにする。

【教材・教具】

- 全文掲示
（児童用、掲示用）
- ふきだし本
- 付箋紙
- 吊り下げ名札

【評価】

前の叙述をもとに、みきがナニヌネノンを見送ったときの心情を想像する事で自分の『ふきだし本』に生かす事ができる。
(観察・ふきだし本)

